営農だより 第1号

目標
① 『米ぬか入り肥料』の施用により、循環型農業の実践
② 粒張が良く、食味値 80 点以上の良食味米

一人ひとりの取組意識が「ごてんばこしひかり」のブランド力を高めます

向こう１か月は暖かい空気に覆われやすいため気温は高いものの、降水量が多い予報です。今年もハウス内の気温が変わりやすい気候ですので、出かける際はハウスの窓の開閉等行い、育苗の温度管理には充分注意しましょう。

良食味米栽培にとって『播種・育苗』が最も重要な作業となります。昔から苗半作と言われるように、苗の良し悪しはその後の稲姿に大きく影響します。**薄播き**をし**温度管理、水管理**に充分注意を払い、活着の良い充実した苗を育て、今年度も**粒張が良く食味値 80 点以上**のお米を作りましょう!!今回は育苗管理を中心にご紹介します。気象庁は今年の夏も厳しい暑さになることを予想しています。丈夫な苗づくりを行い、気候に左右されない米作りを目指しましょう。

≪播　　種≫

	播種期	播種量(箱当たり)		必要箱数
		乾籾	催芽籾	
稚苗	田植え前 20～25 日	115ｇ	150ｇ	16～18 箱/10ａ（3～4 本植え）
中苗	田植え前 30～35 日	85ｇ	110ｇ	21～22 箱/10ａ（3～5 本植え）

稚苗の場合
育苗期間が短い。使用苗箱数が少ない。
中苗の場合
少ない播種量で１本が太く充実した健苗。穂になる率が高い。穂揃いが良くなる。初期の段階で藻類に負けないが、育苗期間が長い。葉齢 3.5 葉まで(約 35 日)の管理が必要。

≪培土使用量≫　～使用量を間違えると、苗の生育に影響するので注意～

「合成培土３号」　床土 1.7 kg　覆土 1.1 kg　7.0 枚／袋
「宇部培土」　床土 2.5 kg　覆土 1 kg　5.7 枚／袋

≪播種時の灌水≫　～充分に灌水する。(灌水量は、使用する培土によって異なる)

目安は、床土を握って指の間から水がにじみ出る程度。
この時灌水量が不足していると発芽不良や籾上がりなどが発生しやすくなります。
灌水時に苗立枯病防除薬を使いましょう。
覆土後の灌水は、酸素不足により発芽障害の原因となるので絶対にしない!!

おいしいをつくりましょ。
富士伊豆農業協同組合

2026 年(令和８年)4 月 3 日
北駿産米改良推進協議会
JA ふじ伊豆御殿場営農経済センター
TEL ： 0550-84-4820

【カビによる立枯病予防剤の散布】

播種時（購入培土の場合も必ず使用）

ダコレート水和剤 → 100g/60L 600 倍 → 120 箱分　1 箱 1,000ml 潅水
（リゾープス菌・トリコデルマ菌・フザリウム菌）
ダコニール 1000 → 100ml/80L 800 倍 → 160 箱分　1 箱 1,000ml 潅水
（リゾープス菌）
タチガレエース M 液剤 → 100ml/50L 500 倍 → 100 箱　1 箱　1,000ml 潅水
（ピシウム菌・フザリウム菌）
※3 種類からどれか 1 つを使用する。

≪苗 管 理≫

1）育苗ハウスの床を均平にする。
2）温度計の設置（最低・最高付）必ず苗の近くに置く。
3）覆土が終わったものから育苗器に入れ 28～30℃に設定（30.1℃以上にしない)。
（途中で育苗器を開けて苗箱が乾燥すると籾上がりの原因となる）

〔育苗器で出芽させた場合〕
出芽後、芽が出揃ったらハウスに広げ、ラブシート等で保温する。
（3 日間を目途に被覆し、緑化を促す）
ただし、出芽から緑化期までは、低温に注意する。

例）**『ハウス内で最低気温５℃以下が続く場合』**
夜間のみ保温シートを使用し、朝はがす。
保温シート（ラブシート、ミラシート etc）や窓の開閉で温度管理を行う。
緑化後は・・・昼間 25℃以上に上げない。⇒　ハウスの開け閉め。
夜間 10℃以下に下げない。⇒午後早めにハウスを閉め温度を下げない。

〔ハウスで出芽させる場合〕
播種した育苗箱をハウス内に平置きにし、シルバーラブなどで被覆し保温させる。
全ての芽が出揃ったら緑化に向けた管理を行う。
※ミラシート、シルバーラブのかけすぎに注意!!
晴天時、密閉状態のハウス内は１時間で 10℃以上温度が上昇します。
焼き苗防止のため、外出の際は換気対策を十分に行いましょう。

※プール育苗では保温資材は不要
プール育苗では水位を均一に保ち、高温にならないよう注意しましょう。
霜注意報が発令した場合は深水にしましょう。
（緑化以降であれば霜が降りなければハウスを開け放しても大丈夫です。）

播種～		２～３日間	４～１５日	１６日～田植えまで
被覆		3 日間を目途に出芽。ハウスに並べた箱からラブシートをかける。	約 3 日間被覆する。緑化終了の目安は第 1 葉が完全に展開した頃。	日中は被覆資材不要、夜間冷える時は早めにハウスを閉める。
温度	昼	３０℃	２０～２５℃	１５～２０℃
	夜	３０℃	１５～２０℃	１０～１５℃
灌水		播種時に床土に 1～1.2ℓ/箱 程度灌水。	基本的には 1 日 1 回。雨の日は量を減らすか、やらない。	1 日 1～2 回。14 時頃までに灌水。夕方は灌水しない。夜温が下がると根張り低下。
換気		30℃以上になる場合は換気を行う。	25℃以上の場合はハウスを開ける。	日中はハウスを全開にし、外気に慣らす。風には直接当てない。
その他		うど芽の長さは 10 ㎜以内。長いと徒長苗になりやすい。	緑化し、第 1 葉が完全に展開したら徐々に日光に当てながら自然環境に慣らす。温度・水管理に気を付ける。	ハウス内の角等は灌水不足で葉が巻きやすいので注意する。苗の葉に異変を見つけた場合は速やかにハウスの外に出す。
プール育苗			緑化期以降は湛水管理となり、昼夜とも窓は開放状態。霜注意報等で 10℃以下が予想されない限りハウスを閉める必要はない。(緑化したら水を入れる。)	

緑化して、2.0 葉期(播種から約 15 日)以降は、田植えに向け外気温に徐々に慣らしていきます。
ただし 10℃以下にならないように朝晩の保温に注意しましょう。
この時期の灌水は『朝たっぷり』を基本に 1 日 1 回程度とし、昼間乾くようであれば 14 時までに追加で灌水し、夕方になっての灌水はやめましょう。（夜温が下がると根張りが悪くなります。）

保温資材一覧

ラブシート

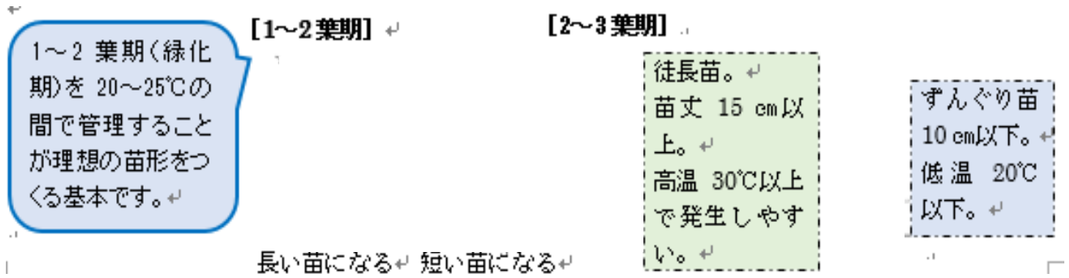
ポリエステル長繊維不織布。適度な遮光と通気で、高温多湿、乾燥状態に陥ることなく、白化現象や葉焼けからも保護します。

ミラシート

ポリエチレンシートで断熱性に富み、丈夫で保温力が抜群です。長期間のシートかけすぎはカビの発生を助長するので注意が必要です。

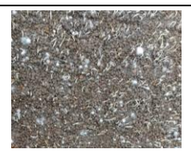
シルバーラブ

アルミの断熱効果により、育苗期間中の急激な温度変化や夜間保温にも効果があります。水分の蒸散を抑え床土に適度な水分を保持し、灌水の省力化を図ります。出芽後は必要に応じて、シルバー面と不織布面の別開閉による管理が可能です。



≪苗の病気≫ ～苗の菌による苗立枯病の症状は下図の４つです

◎エコ栽培米で「エコホープ DJ」を使用した場合は緑色のカビのようなものが発生することがありますが、この場合は薬が効いてる証拠ですので問題ありません。

病原菌	病徴・診断	農薬	発病条件	
リゾープス属菌	発芽～緑化初期に退色し生育が悪くなる。地面より上方に灰色のカビが一面に発生。	ダコレート水和剤	高温・多湿条件下で発生。	
フザリウム属菌	地際部の葉鞘が褐変腐敗し、白色又は淡紅色のカビを生じる。	ダコレート水和剤 タチガレエース M 液剤	播種後低温にあったり、床土の乾燥・過湿の繰返しによる。	
ピシウム属菌	地際部や根が水浸状に腐敗し、白い綿状のカビを生じる。	タチガレエース M 液剤	低温・過湿条件下で発生。	
トリコデルマ属菌	葉鞘や不完全葉が黄化・褐変・枯死し・籾や床土に白いカビを生じ、後に青緑色になる。	ダコレート水和剤	高温・過湿条件下で発生。	

播種にタチガレエース M 液剤を施用した苗、JA 育苗センターで苗を購入された方はタチガレエース M 液剤は施用しない。※JA 苗は施用済みです。またダコニール 1000 を散布した苗でタチガレン液剤を散布する場合は、ダコニール 1000 の散布 10 日後以降に行う（薬害発生の恐れあり）。

≪ほ場の準備≫

春起こし(4 月上旬)　耕運の深さ 15～18 ㎝

春の耕起作業。冬の間に固くなった土をほぐし、空気と水の循環を良くして、作物の根が伸びやすい状態にする。

代かき(田植え前 7～3 日前)　代かきの深さ 5～6 ㎝

水田に水を張った後に土壌をかき混ぜる。土壌の健康を維持し、稲の成長をサポートする。
ほ場を平らにし、田植えの準備を行う。

①土を柔らかくし活着を良くする：水田に適切な酸素量を供給し、土壌をほぐすことで、稲の根がしっかりと張り、栄養を吸収しやすくする。
②土壌内の害虫や雑草の抑制にもつながる。
③水田の土壌を均一にし、栄養分の分布を良くすることで健康な稲作の基盤を作り、豊かな収穫へ繋げる。

JA202560192